

国立療養所大島青松園 史跡めぐりと史料(2)

「国立療養所大島青松園史跡めぐりと史料(1)」
『彦根論叢』第416号(2018年5月)

阿部安成

Yasunari Abe

滋賀大学 経済学部 / 教授

さきに、『彦根論叢』第416号(2018年5月)に掲載した「国立療養所大島青松園史跡めぐりと史料(1)」の、01旧豚舎跡地、02火葬場 風の舞、03相愛の道 雲井寮 つつじ亭、04井戸、05解剖台、06大島石仏八十八か所、07キリスト教霊交会、08大島神社、につづいて、今回は09宗教地区、10防空壕、を載せた(脚注番号も前回からの連続とした)。

一連の本稿にあげた場所や建造物などは、1909年に、当時の行政区域は香川県木田郡庵治村だった大島に設置された、癩そしてハンセン病をめぐる療養所の歴史の跡である。2018年3月にはじめて大島で、そうした史跡についての案内や解説を記した銘板がたてられた。銘板ひとつに載せる案内や解説の文字数は、多くても250字前後までとしたため(以下本稿では四角で囲った文章がそれ)、それを補充するとともに、それらの典拠を示すことが、一連の本稿の目的である。

すでにある案内や解説の銘板に記された内容の典拠を示すのであれば、年表の体裁で簡潔に記したほうがみやすいとのむきもあるかもしれない。わたしは、そうした表記法を意図してとらなかった。理由は、療養者自身が記した、療養所の過去についての記述が、どういう層をなしているのかを知りたかったし、それを書いておきたかったから。

現在、国立療養所大島青松園内で編集発行されている逐次刊行物のひとつに、隔月刊の『青松』がある(2018年7月1日時点での最新号は通巻第700号)。同誌の編集は青松編集委員会、発行は国立療養所大島青松園協和会で、同誌の裏表紙には「協和会(自治会)」との表記もある。同誌のひとつの始原は、1949年1月1日発行の「六巻第一号(通巻四十七)」で、その編集兼発行人は職員の末沢政太。正確な数を把握してはいないものの、同誌への寄稿者はつねに療養者が多かったとってよいだろう。この逐次刊行物など園内で編

集発行されたさまざまな刊行物を活用して、療養者たちはみずからたちとそのものたちが住む療養所と暮らしの場である大島とをくりかえしくりかえし、そうした媒体に重ね書きしてきた。そこではみずからの歴史が、じつに層として記録されている。

これまでわたしは、どちらかというと、おもに、大島に生きた療養者たちの思索の跡をたどるフィールドワークをこの島でおこなってきたようにおもう。今回あらためて、わたしたちが史跡とみなす^{もの}造物を案内したり解説したりする文章をつくるにあたって、これまでとは異なる史料を手にし、『青松』にしてもこれまでとは違う読み方をすることとなった。療養者たちがどういう場に暮らし、どのような環境を生きたのかについて、これまでまるで注意を払わなかったわけではない。それでも、史料をめぐる新規の読み方、探し方、見つけ方は、あたらしいこの構えをわたしに課したとおもう。

09 | 宗教地区

真言宗同体会の御影堂、天理教大島寄進会の会堂、キリスト教霊交会の教会堂、真宗同朋会の本願寺仏教会館があり、宗教地区と呼ばれる。

史跡めぐりのこの銘板には、関係者と相談して、現在ある堂宇などにかぎって記載することとした。かつてはこの4棟よりも多くの建造物があった。

『国立療養所大島青松園五十年誌』(国立療養所大島青松園、1960年。以下『五十年誌』)の巻末に折り込まれた「大島青松園配置図〔昭和34年3月31日現在〕」では、現在の大島会館の左側にある坂道をのぼってすこしゆくと、左手に「17、納骨堂」、ついで「18、大師堂」、そのさきの右にくだる坂をこえると右手に「20、天理教会堂」「21、金光教会堂」、その道をはさんだむかいに「22、仏立宗講堂」、そのさきの右手に「23、キリスト教会」と、

北の山へとつづく道筋に5つ(納骨堂も入れると6つ)の宗教施設が記されている。このあたりを宗教地区と呼ぶも、これは通称で正式な名称ではない。

同書141ページと142ページのあいだのノンブルがないところに載る口絵写真に、「園内で死亡された一、五〇九名のたましいが静かに眠る納骨堂／昭和十一〔1936——引用者による。以下同〕年竣工」「真言宗会堂「大師堂」／大正十五〔1926〕年竣工」「カトリック教々会堂／昭和三〇〔1955〕年竣工」「キリスト教々会堂／昭和一〇〔1935〕年竣工」「仏立宗会堂／昭和三四〔1959〕年竣工」「金光教会堂／昭和七〔1932〕年竣工」「天理教会堂／大正十四〔1925〕年竣工」のキャプションがつく。これらの写真が載る見開きページにはもう1葉、「四国八十八ヶ所を島にうつした石碑」(キャプション)の写真がある。さながら誌上の宗教地区というところか。

さきの地図では現在の霊交荘まえの農園のあたりに「1、事務本館」があり、そのまえにひろがるグラウンドのちょうどスタンドのうしろに、「48、カトリック教会」がある。カトリックの教会堂が宗教地区にない理由は、建立年があたらしいからかとおもうと、そうでもない。

『五十年誌』は、在園者の信仰について、「当園現況」と題された章の節「患者の状況及び統計」のなかに、「宗教」と題した3ページを割り当てた(164-166ページ。同書は全309ページ)。さきにあげた教会堂などは当然のように、療養所の「附属施設」の章ではとりあげられていない。

「宗教」と題された項は冒頭で、長期療養を必要とする患者にとって、精神の安定を求める宗教は、今も昔も盛んであるが、最近では特に精神の安定により、医学的な治療効果の増加を計る為、当所においても留意して、そ

れぞれ患者の求める宗教により、その指導者又は布教師を外部より招聘して、説教、講話などを依頼し、〔中略〕患者はそれぞれの宗教により、その教会又は御堂に一日一回集り、神仏に祈りを捧げ、仏書に又聖典に救いをもとめ、病床にあつて集れない友の為にも、その治癒を祈願し、留守家族の安泰を祈っている。このようにして、宗教により心を慰め、宗教により心の修養に努めている。

と、療養所における信仰や信心の効能を説いている。だから、ということなのだろう、つづけて、「そのため、開所当時の如く職員対患者、患者対患者の、軋轢とか不祥事は全く姿を消し、平穏な療養所となつたのも、患者の信仰心による所が大であると云えよう。」(傍点は引用者)と記すのだった。慰撫と修養と管理のための宗教ということだ。ただしこの項の末尾には、「その他青年層には現存の宗教にあきたらず、人間完成を旨として自己の育成に努めるグループ活動がある。」とは、直前の見解にある宗教の効き目がいまやいくらかであれ薄らいでいるとの謂となる。療養所における信仰は、もっといねいに説かなくてはならない¹³⁾。

同書の「宗教」の項には、「宗教団体調」が載り、団体名、創立年度、信者数(1958年時点)、会堂設立年度、を記録している。それを順にあげると、真宗同朋会、明治42=1909年(命名は大正12=1923年)、218名、記載なし、真言宗同体会、明治42=1909年(命名は大正15=1926年)、287名、大正15=1926年、キリスト教霊交会、大正3=1914年、60名、昭和10=1935年、天理教寄進会、大正14=1925年、34名、大正14=1925年、金光教求進会、大正14=1925年、19名、昭和7=1932年、カトリック教聖心使徒会、昭和25=1950年、13名、昭和30=1955年、仏立宗六清会、「大正年

間」に日蓮宗妙見講としてあつたが昭和三十四〔1959〕年改名」、18名、昭和34=1959年。

カトリック教会だけいわゆる宗教地区にない理由は、教会堂の建立があたらしいからではなく、信徒団体の創設が上記宗教団体のなかでもっともおそかったからかもしれない。それはべつとして、療養所設置の年に、あるいは、それから5年後に、30年を経ないうちに、いくつもの宗教団体が結ばれていた。

この項にある「信者数調」の表には上記団体のほかに、「(無宗教)／思索会」6名、「その他」49名があり、それらをふくめた総計が704名である。同書の「開所以来患者異動調」の昭和33=1958年の「年次繰越患者数」の「累計」が704で(177ページ)、これがこの時点での在園者総数となろう。するとわずか7.8%のもののみが宗教団体にくわわっていなかったのである。結団がはやく、入信率が高い、これはハンセン病をめぐる療養所のたしかな特徴として一般化できるのだろう。

在園者によって編まれた史誌としてあげられる、『閉ざされた島の昭和史—国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』(大島青松園入園者自治会(協和会)、1981年。以下『島昭和史』)では、「終章」のあとに「それぞれの歩み」と題されたページがあり、そのなかに「宗教団体小史」(203-207ページ)が記され、「現在、園内には八つの宗教団体がある」とのこと。さきの『五十年誌』にはみえなかった各団体の情報をあげよう。

真言宗同体会の御影堂は、「大正10〔1921〕年から14年にかけて、会員によって御影堂建立の敷地を造成。この期間に本山寺住職大僧正長田実毅師が発起人となり四国霊場会賛同のもと浄財三、七〇〇円を募金、建坪一六坪、鉄筋コンクリート銅板葺き本堂を大正15年10月25日竣工、〔中

13) 大島の療養所でのフィールドワークをふまえて、自治と信仰と修養の三連環と、それを結節とするもう2つの項に文筆と演劇があると指摘した(阿部安成「島の書、書の園—国立療養所大島青松園をフィールドとした書史論の試み」『国立ハンセン病資料館研究紀要』第2号、2011年)。

略] 本尊高祖大師尊像」とのこと。「[昭和] 37 [1962] 年には御影堂を増築(一四・五坪)」、同「55年7月2日正午、不幸にも御影堂祭壇付近より出火、全焼した。7月4日から再建資金を募金、9月再建に着手、56年1月竣工予定」。

『青松』誌上では、通巻第362号(1980年9月)が「大島真言宗同体会より」(7月10日付)の表題稿で失火を陳謝し、「ご本尊と過去帳が奇蹟的に、この難をまぬがれましたこと」を報告した(23ページ)。ついで同誌通巻第364号(1980年12月)が10月8日の「真言宗御影堂上棟式」のようすを写真つきで伝え(撮影三戸忠、12ページ)、さらに同第367号(1981年4月)収載の「園内レポート」が「大島青松園真言宗御影堂再建」をとりあげた(24ページ)。「<写真説明>うす鼠色のそり屋根が松の緑に映えて美しい。新築なった御影堂。」の文字を添えた写真は「撮影・鳥栖喬」。記事は、「焼失七月二日、起工式八月三十日、竣工式十二月二十五日、落慶法会一月十九日というスピードぶりであり、設計者は青松園の若松技官、施工者は高松の三協建設株式会社、建て坪三五、五坪、工事費一、六〇〇万円、仏具その他附帯設備費約四〇〇万円、様式は純日本式木造建築でしかも寺院式のそり屋根で、優雅な御影堂が再建された。」と伝えた(25ページには、「落慶法要施行のため入堂される四国県下の真言宗各派の僧侶たち。」「善通寺蓮井管長の導師により、おごそかに落慶法要がとり行われる。」「落慶法要終了後、謝辞を述べる真言宗同体会の野村会長。」の「写真説明」がついた3葉掲載)。

『島昭和史』の記述にもどろう。真宗同朋会については、その「名付け」が「大正4〔1915〕年頃」であること、「御本尊厨子が寄贈された」ときが「大正8年以降」、「現在の本願寺仏教会館」は「昭和

40〔1965〕年〔中略〕西本願寺社会部長林竜雲先生をはじめ宗派関係者のご尽力により二〇〇万円余の西本願寺財政よりの御援助」で「実現」したことが記されている。

キリスト教大島霊交会の名称は時期によってまちまちで、一貫した正式名称があるわけではない。教会堂の竣工年月日は、1935年5月21日とのこと。この項には、「特筆すべき経過としては」との書き出しがあり、「創立時から二、三年と、大正10〔1921〕年頃の二度にわたって、他の既存宗団が連合して霊交会(キリスト教)に対する迫害行動をおこしたということ。また、このこととたたかうため、霊交会の会員は、ブリキでつくった十字架に赤布を貼りつけ、これを胸にとりつけてキリストの僕(しもべ)であることを鮮明にして、おそれず行動したということである。」と記録されている。ほかの宗教団体の記述には、こうした「迫害行動」をうけたとはみえない。キリスト教にのみ、こうした迫害があったか。

天理教寄進会は、「大正3〔1914〕年に一人の信者が入園し」たことがはじまりで、「大正13年から高松部属八栗宣教所長木村留吉先生が布教に来園されるようになり、「天理教寄進会」と命名、〔中略〕初代会長は北山謙三氏であった。／〔中略〕昭和5〔1930〕年に信者が力を合せてバラックの教堂を建て、同年12月落成、12月18日落成の式典を挙行。その後本格的な教堂建設の機運が高まり、香川教区、高松支部ほか多くの支部からご寄付をいただき、昭和36年12月3日、現在の教堂が竣工」。

金光教青松園求信会は、「昭和4〔1929〕年太田垣益一氏を代表として求信会が生れた。〔中略〕大阪求信会の集りで白紙献金がなされ、青松園求信会々堂建設資金の浄財が集められ、〔中略〕信者の大工により昭和7年5月25日、会堂が落成。」

カトリック聖心使徒会は、「宗教団体として公認されたのが昭和25〔1950〕年4月16日。〔中略〕職員側信者(林富美子医師他)の協賛は大きな力となった。聖堂の建立は昭和29〔1954〕年5月30日。〔中略〕／会発足とともに発行した機関紙「海のほし」は、「献堂二〇周年記念誌」以後休刊。理由として会員が少ないこと〔「発足当時の会員は七名。〕、会員の老令化(平均年令五九・四才)」とのこと。

『青松』通巻第92号(1954年7月)の「あとがき」欄に「現在園内で印刷されている〈がり版〉ものは上記の五誌である」と、同欄のうえに載る「園内出版物一覧表」にあげられた5誌のうちのひとつに、「海のほし 6号 18ページ50部／聖心使徒会発行」がみえる¹⁴⁾。この『海のほし』は、ながいあいだその所在が不明だった。それが、2018年6月12日に、石居人もがすすめている大島の文化会館図書室整理において、同館書庫にあるとわかった。それは、さきの『島昭和史』にいう、「献堂二十周年記念誌」として発行され、かつ最終刊となった1冊だった。編集は聖心使徒会、発行大島カトリック教会、全49ページで、1974年の発行か。同書には、「写真にみる20年の歩み」「年譜」などが載る。「年譜」には、『海のほし』は1950年12月20日に創刊され、1955年5月5日発行の第8号までが記され、また、1958年3月31日には「大島カトリック教会史「思い出」発行。」とみえる。

さきに同誌が所在不明だったと記したが、同会を調査もせず尋ねもしていないところでの断定は怠慢にすぎる。今後の課題としよう。

本門仏立宗大島六清会は、「昭和32〔1957〕年名古屋市の清水喜代子さんと、当時職員であった海老沼健次さん(お二方は現在故人)との出会いが機縁となって〔中略〕33年3月に六清会を結成し

た。／それから一年後に仏立宗本庁をはじめ、関係各位の尽力によって大島六清会講堂を建立。34年6月23日本庁から小山日幹上人をお迎えて仏立講堂の開堂式を挙行了。」。

日蓮正宗創価学会の「団体結成は昭和36〔1961〕年7月。〔中略〕／大島集会所の建立は昭和51年7月20日で、日蓮正宗創価学会本部の寄贈による」。

これら各団体の記述は、「各宗教代表が執筆、編さん委員会で要約した」とのこと。

真言宗同体会についていうと、2017年度の社会交流会館展示準備において、同会信徒から所蔵記録の情報提供があり、以下の諸綴があるとわかった。それら綴の表紙に記された情報をあげると——「大正拾三年以降／寄附帳／同体会」「昭和二年以降／寄贈品簿／同体会」「青松園大師堂再建志納芳名簿／四国八十八ヶ所霊場会」「昭和五十五年七月三日以降／寄贈品台帳 真言宗同体会」「昭和五十五年七月二日以降／同体会御影堂建設に伴う記録／同体会」「記録帳／御影堂増築工事／昭和参拾七年五月二十日」「記録帳／八十八ヶ所移動／昭和参拾壹年度」「御影堂再建寄金／会員御芳名／真言宗同体会／昭和五五年七月四日～九月一四日」「自、昭和五十五年九月十五日／至、／御影堂再建寄金／会員芳名／真言宗同体会」「自昭和五十五年九月一日／至、／御影堂再建寄金／会員外御芳名／真言宗同体会」「御影堂再建寄金／会員外御芳名／真言宗同体会／七月四日～八月三十日迄」。

『島昭和史』の「宗教団体小史」は、「どの宗教にも属さない者」についても記載している——「戦前には「キラク会」、戦後には「思索会」という無宗教団体もあったが、現在はそうした組織も無く、個人の自由意志で現存の宗教団体に入会していな

14)ほかの4誌は「内海詩人9号 18ページ60部 詩人会発行」「蛙の子7号 30ページ35部／少女三人発行」「灯台1号 16ページ65部／杖の友会発行」「表情3号 8ページ120部／青松編集部発行」で、「その殆んどが自費出版であり、それぞれに活潑である。目的は各々異なるけれども広義に解釈すれば、

園内だけでなく社会的に波及する啓蒙には見逃すことの出来ない潜在的働きをしている。」との評価が示されている(「あとがき」)。なお「この他に保育所から「楓」新聞が発行され、庵治第二中小学校からは「学校新聞」が出版されている。」とのことだが、これら6誌紙のうち「灯台」以外は未見。

い。」とのこと。同項はまた、「開所当時から現在まで宗教の果たしてきた役割は大きい。」ととらえ、それを説いている——「昔は無頼の徒も多く、共同生活が乱されることもあったが、そんな時、宗教の世話人が説得したり、目にあまる者は宗教団体から除名して懲らしめたといわれている。宗教は信者の心の拠り所であると同時に、園内の秩序維持にも寄与してきた。」。問うべきはここにいう「園内の秩序維持」の内実である。療養所の「秩序」を「維持」するために宗教は機能し、そのように当局によって利用されてきたのか、あるいは、療養者がみずからをみずからとして成り立たせるとともに他の在園者につながり、みずからの生きる場をわれわれの生の空間としてつくりあげるとき、そこに信仰や信心がどのようにかかわったのかを考えるのか、である。

大島青松園入園者自治会(協和会)が発行した著述にある「園内の秩序維持」の言辭は、ここまでみてきたとおり、宗教なるものを記すにあたって、既存の、他の、くりかえし用いられたきた語を借用したとの観がある。それよりは、同書でそのあとにつづく——「人間の心には金銭や物品では満たされない部分がある。入園者の老令化とともにその生き方もむつかしくなってくる。しかし施設も自治会も、個人の「心」の問題にまで深く立ち入ることはむつかしい。そうした意味からも、今後の宗教の果たす役割はますます重要になってくるであろう。」という「個人の「心」の問題」への着目が、宗教をみずから(たち)のこととして考えるときの要諦となるのだろう。部外者もそこをみつめる必要がある。

『青松』誌上で「神社・宗教会館シリーズ」(表紙見返し)が通巻第436号(1988年4月)からはじまる。その第1回が大島神社(「目次」と「あとがき」によると表紙絵は事務長補佐の鈴木美佐雄がそ

れを描く)。記述の出典は、『島昭和史』所収の年表と「古い自治会の日誌」。執筆は中石俊夫。「祭礼は10月25日。昨年一年間の賽銭三六四四円。」という。神社の移りかわりが、「いやはや、入園者は国によって故郷から追放され、大島に流されて来たが、神様も、終戦後アメリカ軍に追放され、大島南部の村の権現様の社に匿われて、19年間も隠遁生活をなされていた。神様も人間も権力には弱いようである。」との感慨も記された。

シリーズ②は「キリスト教会」(同第437号、1988年5月)。教会堂が「アメリカン・レプロシー・ミッションから寄贈された」経緯は、「昭和6〔1931〕年MTLの会長ダンナーさん一行が大島を訪問、霊交会の活動に感銘され、さらにオルトマンズ氏、エリクソン氏のご尽力もあり実現した。」とのこと。竣工後の「大修理」としては、「増築も兼ねて好善社のご援助により、予算144万円余で昭和38〔1963〕年10月工事にかかり、39年3月21日完成式。創立50周年の記念事業として何よりの贈りものになった。」とのこと。この記事にいう修繕のちにも、図書室の書架の補強と増設と壁面の防湿のための改修工事を、2008年秋から翌2009年2月にかけておこなっている。

さかのぼると、この教会堂ができるまえは、「昭和4〔1929〕年会員の献金でバラックの祈りの家を建て、さらに昭和6年二間に五間半のものに建て替え、現在の教会堂に至った。二度目の祈りの家は後に移転費をつけて自治会へ寄贈、現在の青松編集室になった。」。

このキリスト教会の記述の「参考文献」には、土谷勉『癩院創世』(木村武彦、1949年)と『霊交会創立五十周年記念誌』(笠居誠一ほか編、大島青松園霊交会、1964年)があげられている。署名は「中石」。

さて、ここで、現在の教会堂のまえに使われていた祈りの家についてみておこう。『青松』通巻第300号(1974年7月)が「300号記念集」を組み、その巻頭稿が「青松三〇〇号発刊にあたって」と題された(署名「岡本」)。

「天に雪霜なくんば青松も草に若かず、地に山川なくんば人何ぞ平地を尚ぼん。」の古語と、青松園の青松にちなんで「青松」が最もふさわしいと、初代編集長土谷勉氏が命名したと聞く。／昭和七〔1932〕年から発行されていた藻汐草が、時局の推移と、官憲の圧力などで昭和十九年七月一一二号〔第13巻第6号通巻第113号〕を以って廃刊〔同誌上の表記は「休刊」〕となり、同年十一月先輩諸兄が、文筆の情とどめ難く園内版なら、古用紙利用なら、あるいは手書きなら問題はないだろうと、理由を見出し、青松第一号を誕生させた。爾来三十年、敗戦の虚脱、戦後の荒廃、現在の驚騒と時代は急激に移りかわって来たが、この困難な時代を乗り越えて三百号発刊を迎えたのである。正に、天に雪霜なくんば、である。この三十年間の青松をひもとくとき、故人になられ誌上から消えた先輩も沢山おられる。これを見ると、三百号発刊ということが如何に大事業であるか、また、どれ程の努力が必要であったか、かを伺い知ることが出来る。／機関誌は時代のあかしである。青松園の記録である。また希望であり、師標でなければならない。と同時に普遍的であることが必要であろう。／ハンセン氏病療養所もすべての面で老令化の一途をたどっている。それだけに三〇〇号発刊は意義深い。従ってこのともしびを絶やさぬことが先輩諸兄の努力に報いる道でもあると思う。／上掲の写真は、青松第一号発刊約三年後の昭和二十三年編集室となり、初代編集長土谷氏から

二十七年使用されている。二代編集長朝〔滋夫〕氏名づく、夢想庵。鬱蒼と茂る木立にもその年輪がしのばれよう。〈岡本〉

その「上掲の写真」には、「青松編集室「夢想庵」全景」のキャプションがつく(撮影鳥栖喬)¹⁵⁾。木立につづく道の左側に、ちいさな小屋が写っている。同誌通巻第300号発刊を記念した文章だから、その編集室について書いたのであって、それがまえにだったかにはふれられていない。同誌通巻第419号(1986年7月)の「雑壇」欄(署名中石、9ページ)には「編集室前の桜」の見出し——「編集室の南側に、大きい桜が四本ある。三本はソメイヨシノ、一本は八重桜。〔中略〕この桜は「昔、炊事場近辺にあった桜です。私が重いからだめだ」といって、矢野孝吉さんが“何ぬかす、おれがかついで行く”と、意地になって裸でかつぎ、肩が血だらけになって、手当てをしてもらった、由来の桜です」と、土谷勉さんのお便りにあった。／孝吉さんは、すでにこの世にないが、桜は大木になって、今年も見事な花を咲かせた。』

2018年の初春のころだったか、自治会でのお茶の時間に、キリスト教霊交会教会堂からさきにある椿を植えたひとが矢野であると聞いた。この土谷の便りにあったひとなのだろう。遠くは国立療養所長島愛生園など、あちこちの木を接ぎ木したとのこと。北の山につづく道の左側は桜並木でいまは桜公園となった。その右側、教会堂のさきには大島八十八か所の石仏と楓があり、その陰であまり目立たない場所ながら、みごとな椿の林がある¹⁶⁾。

編集室にもどろう。『青松』通巻第459号(1990年7月)の表紙見返しにある「園内レポート」(「文・中石俊夫／写真・瀬戸口裕郎」)が「さらば、古き編集室よ」と題された。

15)「夢想庵」名づけの親にして『青松』の「編集責任者」編集長をつとめた朝滋夫の訃報が『青松』通巻第500号(1994年8月)に載る(署名「中」の「雑壇」、43ページ)。「初代編集長」土谷勉は社会復帰のち死去し、『青松』通巻第475号(1992年2月)が「土谷勉氏追悼特集号」として編まれた。

16)『青松』誌上に橋田芳明による連載稿「青松園の樹木」全12回(同第417号、1986年5月から同第431号、1987年9月まで)にこの椿の記述はない。

去る4月18日、長い間使い馴れていた青松編集室を引き払い、図書室のある、文化会館の一室に移転した。玄関を入ってすぐ左側の七・五畳の狭い部屋。今までの編集室が十六畳の広さだったので、まるで穴蔵へもぐりこんだ感じである。／旧編集室にいつまでも居たかったのであるが、家屋の老朽化がひどく、家が傾き、雨漏り、壁土の崩れ、開かずの窓など、老屋そのものであった。台風が来ると窓を釘づけにし、大事な原稿は部屋へ持ち帰り、翌日、吹き飛ばされないでいた編集室を見て、やれやれと胸を撫で下ろしたものであった。／離れたい深い愛着があったが、思い切って退去した。旧編集室は、昭和10〔1935〕年キリスト教霊交會が建立された時、それまで使っていた祈りの家を、移転費をつけて自治会へ寄贈されたもの。戦前は集会所として使用されていたが、戦後、編集室専用になった。大島の文化の源であった。大島の昭和史を知っている重要文化財である。長い間ご苦労さまでした。

この稿にはまた、「ゆるやかな坂道の途中の編集室。この窓から小豆島や庵治半島が見え、ウグイスや野鳥の声もきいた。」「玄関。鴨居が傾き、開けた戸が自動的に閉まった。小さかった左のサルスベリと右のサザンカが数十年を経て、大きくなった。」の説明文がついた2葉の写真も載る。

さきの「神社・宗教会館シリーズ」がとりあげた教会堂の記述にも、祈りの家は「移転費」をつけて寄贈とあった。祈りの家と編集室は場所がいくらかちがうのか、編集に必要な物品を「移転」する費用ということか。

同第469号（1991年7月）表紙絵が中村泰旺による「旧編集室」。「表紙絵について」の署名は「せとぐち」（1ページ）——「一寮の裏手から、緩やか

な坂を上っていくと中腹に一軒だけの古い平屋建がある。昭和初期から平成二〔1990〕年四月まで五十年以上の永きに渡り風雨に耐えてきた。／昭和十〔1935〕年、キリスト教霊交會の礼拝堂が建立されたとき、自治会に寄贈され、以来集会所に、戦後は編集室として使用されてきた。／近代化してきた島の中で、昔を語る数少ない文化的遺産である。】。

同第500号（1994年8月）が「通巻500号記念特集」を組み、表紙見返しに「昔の「青松」と編集室」の見出し記事を載せた。「平成6〔1994〕年5月27日撮映 湯浅一忠」「今にも崩れそうな昔の編集室。40年余り、ここで編集し、批評会をし、夢を語った。／夏草や兵どもが夢の跡 芭蕉」の文辞と写真が載る。編集室移転後もすくなくとも4年はこの小屋が残っていたのだ。

「神社・宗教会館シリーズ」にもどろう。その③「カトリック教会」（『青松』通巻第438号、1988年6月）——

「カトリック教会を建てる敷地のことだが、君がいた全生園ではどの辺にあったかな……」「礼拝堂の近くに、新教と旧教が並んでいました」「大島では新教の教会の付近が宗教地区になっているが平地が少なく整地も大変なので、並べて建てるより、ずーっと離し……、北と南から鐘が鳴るのもいいじゃないか……」／これは当時の野島泰治園長先生と国分正礼事務長さんの会話。職員宿舎の跡地、大島の真中あたりになる現在地を選定されたように覚えている、と国分氏は記している（「海のほし」昭49〔1974年〕・10）／当時、患者が出入りする建物を職員地区に建てたのは大英断であった。〔中略〕／大正7〔1918〕年から昭和6年にかけて、大島に4人の信者がおり年に数回ミサを捧げていたと言われ

ている。さらに毎日自室の机の上にローソクをたて、ロザリオを繰って祈っていた人、金曜日には肉を食わなかった人がいた、という話もある。

この稿の執筆は中石俊夫、「参考文献」として「『海のほし』1号・昭25～8号・昭30「思い出・大島カトリック教会の沿革」・昭33「海のほし・献堂20周年記念誌」昭49ほか」があがっている。さきにも瞥見したとおり、逐次刊行物『海のほし』全8号とその「献堂二十周年記念誌」と『思い出』という著書が、このカトリック信徒たちを知るときの縁となるのだろう。中石はまた、「昭和6〔1931〕・7年頃の自治会日誌には、当時徳島から田中英吉師〔司教〕が来園されていたことが記されているが、その他には定かな記録は無く、戦前の詳細は不明。」と記した。

国立療養所大島青松園入所者自治会（協和会）の事務所倉庫にある史料のひとつに、「協和会々則在中／庶務部」と記された木箱があり、そのなかに、「聖心使徒会組織ニ関スル書」と記された包み紙にくるまれた、「聖心使徒会々則」と「仮称聖心使徒会／結成に関する具申書」（1950年3月4日、協和会総代宛て）の2通の手書き文書がある¹⁷⁾。

シリーズ④「真言宗御影堂」（同第439号、1988年7月）は、その冒頭で北の山につづく「坂道の上の両側が宗教会館地区である。」と記している。「宗教地区」「宗教会館地区」とそのあたりの名称も一定していなかったようだ。この当時の御影堂は「三代目」とのこと。初代（「大正10〔1921〕年から14年にかけて、会員が敷地を造成。」したうえで1926年竣工）、2代め（1962年増築、1980年焼失）、そして3代め（1980年竣工、1981年落慶法要）となるか。無事だったという「御本尊本体は少し焦げた程度」ではあったとのこと、焼失後の仮移転先は「文化会館囲碁室」、現在につづく3代め御影

堂は「建築面積117ヘーベ、礼拝室32畳。」。

中石俊夫の執筆の同稿は、『五十年誌』『島昭和史』と「真言宗同体会日誌」を「参考文献」としている。同会の日誌は未見。

シリーズ⑤「真宗仏教会館」（同第440号、1988年8月）は、『五十年誌』と『島昭和史』を「参考文献」として中石俊夫が執筆し、その冒頭でさきにもみた、『五十年誌』「宗教」の文章を引用している。ついで、「真宗においては、高松興正寺派別院の僧侶が、明治、大正時代から来園されていたようである。」と記す。「現在の真宗会館は、昭和40〔1965〕年、〔中略〕二〇〇万円余の西本願寺財政よりのご援助で建立された。同年5月27日〔中略〕盛大に落慶法要が営まれた。」この会館建立以前は、「毎日の礼拝は、一般の礼拝堂でおこなっていた。現在の大島会館〔旧大島会館〕の北側に建っていて、慰問演芸、集会、葬式、などがおこなわれていた会館で、職員側舞台にりっぱな仏壇があった。そのご本尊が、真宗会館に今もまつられている。」とのこと。

この稿にはほかにはない物故者の「遺骨」についての記載があり、「中陰法要〔四十九日〕のあと、遺骨は納骨堂へ納められる。／納骨堂の中では、生前と同じで、仏教の人も、キリスト教の人も区別せず、仲良く、狭い棚でひしめき、並んでいる。／極楽は、この世界の西方、十万億の仏土を経たかなたにあるという。極楽往生を願って、みんなは信心している。」と稿を結んでいる。

シリーズ⑥「本門仏立宗・仏立講堂」（同第441号、1988年9月）の執筆者と参考文献はさきにおなじ。「ほんもんぶつりゅうしゅうの園内信徒会の名称は「仏立宗六清会」〔中略〕療養所開所当時の明治42〔1909〕年、入園者総数120人のうち、日蓮宗信者8人、と記録にある。当時天理教2人、金光教3人よりも多い。また仏教には本尊が同じで、

17) 阿部安成ほか「香川県大島の療養所に展開した自治の痕跡—療養所空間における〈生環境〉をめぐる実証研究」（『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』第10巻第1号、2013年）。

いくつかの宗派に分かれている例があるが、当時の日蓮宗がどの宗派であったかは不明である。」とのこと。

執筆者の中石は同宗講堂の描写を、「宗教会館地区の坂道の途中、東に向いて、ひっそり建っている。前も後ろも、周り一面樹木がうっそうと茂り、昼間は寂として、人影もない。／風が木の葉とたわむれ、時に鳥の声もして、お堂に一人坐っているだけで、心が落ちつくような気がした。」と記した。「お堂の礼拝室は12畳。」だった。いまは建造物がなくなった同宗講堂跡地には、「大島仏立講堂古跡縁起」(「平成十四〔2002〕年4月28日 本門仏立宗」)と刻まれた石碑などがたつ。「お堂の前の大きい二本のカイズカと、後ろの松は見事で、人気がないお堂を守っているようにも見える。」と中石が記した木々もまた、いまはない。

どの宗教も、年年歳歳、入園者の減少とともに会員数も減っているが、六清会の会員は、園内最少となった。〔中略〕／現在の会員三人は不自由で、内外の掃除も、会員外の人に依頼している。他の宗教も、かろうじて会員が清掃しているが、近い将来、どの宗教も、その会館の管理を、園か、外部の信者に委託しなければやっていけないだろう。

と記されてから30年が過ぎようとしている。中石の懸念が実際に進行している。

さきに引用した木々の描写のまえ、ひとり座るようすのあとに、「宗教は人の心を満たすか」という問いも、現代にはあるが、病む者にとって宗教的な何かを支えになるかもしれないと思えるような気もする。」(傍点原文)との、ずいぶんとまだるっこしい1段落を中石はおいた。彼にもまだ、それがなにか、わからなかったのだろう。

シリーズ⑦「金光教青松園求信会会堂」(同第442号、1988年11月)は、参考文献はさきにおなじ

だが、執筆者名がみえない。同稿は冒頭で、「手入れのゆき届いた姥目櫓の生け垣に囲まれ、庭も周りも、うっそうと松、雑木などが茂っている。／表紙絵は、建物の姿をはっきりさせるために、周囲の樹木を省略しているが、実際は、小さい森の中に会堂がある感じで、神様を祀る場所にふさわしい。」と会堂を描いてみせた。この会堂の記憶がわたしには臚げで、「うっそうと」したというそのようすをおもいだせない。背の高い枇杷の木々があつたとばかり覚えているが、それもいまやなく、会堂がなくなった跡地に大島神社が移転された。

「記録によると、「昭和4〔1929〕年、太田垣益一氏を代表として求信会が生まれた」とある。しかし「大正14〔1925〕年創立」という記録もあり、他の宗教も含めて、明治、大正時代の詳細は不明」とのこと。「会堂内部の正面奥に神殿があり、神殿の上には、筆太の金文字で書かれた「天地金乃神」というりっぱな扁額がかけられている。礼拝室は12畳。／戦後、東側と西側に控室が増築され、数年前には屋根瓦も葺き替えられた。」との描写が、いまはない会堂のようすを伝えている。

稿の末尾にいう、「この会堂も、56年間の青松園の歴史を見てきた。これからの青松園はどうなるのか、神様は教えてくれないが、会堂は青松園最後の日を、見届けてくれそうである。」との執筆者の望みもかなわなかった。

シリーズ⑧「創価学会・大島集会所」(同第443号、1988年12月)の署名は坂崎知能、「参考文献」は『島昭和史』——「園内8宗教団体のうち、6宗団の礼拝堂が北の山から突起した尾根に点在。もう一カ所は小高い丘に建てられていますが、この集会所だけが平地に建立されています。〔中略〕／集会所の総面積は97ヘーペー余で南向き。前面には老人福祉会館や厚生会館、面会人宿泊所が並列していますが、閑静なところ。／仏間は28帖、控

え室6帖等」。

シリーズ⑨「天理教大島寄進会教堂」（同第444号、1989年1月）の執筆者はさきにおなじ、「参考文献」は『五十年誌』と『島昭和史』。

敷地の周囲はウバメガシが防風にふさわしい高さに整枝されていますが、このあたりからは、大小の松並木ごしに赤や青のカラフルな屋根瓦の各寮舎や、冑や鎧の島じま、遠く左斜めには観光の島・小豆島が横たわっている風光明媚な所。

にいつ教堂がたてられたか——「療養所開所当時の明治42〔1909〕年には信者は2名、大正7〔1918〕年には3名。朝夕の礼拝は自部屋、海岸、納骨堂付近で行なっていましたが、〔中略〕昭和5〔1930〕年に信者が力を合わせてバラックの教堂を建てて礼拝していましたが、本格的な教堂建設の気運が高まり、〔中略〕昭和36年12月3日現在の教堂が竣工」とのこと。さきの『五十年誌』記載の「天理教会堂／大正十四年竣工」の具体相はわからない。

このときの「教堂の内部は祭壇のほか、お神楽をあげる上壇が板張りで12帖相当、遙拝室が18帖等で75へーべ余り。又その昔まで教堂として使用していた20へーべ弱の家も生垣の中に現存しています。」という。いまでも敷地内に2棟ある建物のどちらかが「その昔まで教堂として使用していた」建物か。

第二次世界大戦の戦時下、1941年5月29日「各宗派の建物を療養所慰藉会へ寄付移管する。」との記録がある（『島昭和史』収載「年表 自治会・青松園関係」）。

この宗教地区には現在、銘板に記したとおり、4信徒団体の建物5棟があり、本門仏立宗（六清会）仏立講堂跡地には石碑がたち（「大島仏立講堂古跡縁起」2002年4月28日、「南無妙法蓮華経」、

「寂光同帰の友」）、金光教青松園求信会会堂跡地に大島神社が移された。北の山へつづく丘をのぼった左側に納骨堂と¹⁸⁾、そのまえに、「南無仏」「鎮魂の碑」「小林博士之碑」の3碑があり、丘のなかほどから奥へと大島八十八か所石仏がならぶ。園の宗教地区とよぶにふさわしい場所である。

10 | 防空壕

大島では1935（昭和10）年に防空演習と灯火管制が行われたとの記録がある。アジア太平洋戦争下の1945年3月には横穴式防空壕の位置選定が始まり、療養者が組織する奉仕団によって壕が掘られていった。同年7月の高松空襲の猛火を大島では目の当たりにした。／「壕中に避難の団扇賑はしく」「横穴の壕掘り急ぐ空高く飛ぶ日の丸のつばさ光れり」「壕口に敵機にらめる日焼顔」の句歌が残る。

『五十年誌』収載の「年譜」には、戦時にかかわる出来事の記載がほとんどない。そうしたなか、1945年7月4日のこととして、「未明高松港に繫留中の所属船楓丸及び松風丸二隻戦災のため焼失。右戦災のため高松市の大部分罹災し死傷者多数。ために当日より八日間園長以下医官交代にて看護婦其の他職員を従え全市に移動救護班として出張、極力救護に努めた。」との記述がある（52ページ）。

『島昭和史』収載の「年表 自治会・青松園関係」に、1935年のページに5月28日「灯火管制による防空演習実施。」、1938年のページには8月2日「音響管制併行の灯火管制実施。」、おなじく1940年9月18日「防毒、防空演習を職員、患者合同で行なう。」、1941年10月5日「所内隣組を結成。」、同月11日「患者連合奉仕団結成式を行なう。」、1942年1月1日「大島神社への戦勝祈願<日参>を隣組巡回制により開始。」、同年8月26日「火鉢その

18)「神社・宗教会館シリーズ」の最終第10回は「納骨堂（華嚴蔵）」。

これについては、本稿シリーズ(3)の「12納骨堂」でとりあげる。

他金属類回収、献納。」、1944年7月29日「鉄製ベッドを金属回収に供出、木製に取替える。」、同年9月3日「掩蓋式防空退避壕を園内各所に構築する。」、同年10月25日「戦局きびしく運動会中止。」、同年12月1日「食糧不足により甘藷飯となる。」、ついで、年表に記された1945年の事項をすべてここに載せよう。

- 1・26 飼料不足のため養豚部閉鎖。
- 2・25 大吹雪、米編隊機庵治海峡を進行、退避の警鐘初めて鳴る。
- 3・13 総代推戴臨時制度を設ける。
- 4・7 六〇〇人収容横穴防空壕構築着工
- 5・2 軍管区の指令により「防空監視哨、機雷監視哨」設置。
- 6・25 副食一回分代用に食塩二匁あてとなる。
- 7・4 高松市空爆に遭い、当園職員一ニ家族被災する。
 - 9 高松戦災見舞金抛金、三一八円九三銭。
 - 29 義勇隊結成、隊長は自治会総代。
- 8・15 終戦の詔勅下り、防空壕掘りと祈願日参を中止する。
- 9・13 患者担当の防空機雷監視哨解散式
- 12・5 沿岸に漂着の旧軍隊弾薬などの爆発物処理。
 - 18 長田穂波氏急逝す(10月30日大塚顧問も逝去する)
 - 28 修養団大島支部解散。

島の療養所に戦時色が増し、それが徐々に消えてゆくようすがみえる。

「開園50周年記念号」を組んだ『青松』通巻第151号(1959年11月) 掲載の「国立療養所大島青松園年譜【編集部作製】」の1935年から1945年までの記載事項は、さきにもた『島昭和史』の年表にほぼおなじ。『島昭和史』がこの「年譜」を参照したのだろう(600人収容横穴防空壕構築着工が4

月5日のことと記載。ただしすぐあとでみるとおり、7日が正しいのだろう)。あさの・しげる「諸般事始」(62-80ページ)には、戦時にかかわるつぎの3項などが記されている。

防空退避壕掘る(一九四四、九、三) 奉仕団(壮年団、青年団、婦人会を一括したもの)によつて不自由療、婦人寮地区に設ける。花園の犠牲になったところもある。軽症者たちはみずから療舎のあいだに掘つた。

横穴式防空壕に着工(一九四五、四、七、昭和二〇年) 沖繩国頭愛楽園が空襲の余波を受けたが、横穴防空壕があつたので一人の死傷者もなかつたことをきいた。そして今月中に六〇〇人収容できる防空壕構築の指令が、三月二二日にきた。奉仕団が、これにあつた。ノミとツチ、そして手製のツルハシとをもちいて掘つた。三ヵ所掘つて、そのうちの二ヵ所を東から西の浜へ貫通すべく掘つているうちに終戦。中止(一九四五、八、一五) この防空壕は甘藷の貯蔵庫としてながく使用した。

防空機雷監視哨設置(一九四五、五、四) 島山の頂上に標識灯をたてて点滅、内海を航行している船舶に空襲の予報をした。中止(一九四五、八、一六)

戦時下の大島で編集発行された逐次刊行物である『藻汐草』の通巻第87号(1942年3月)をみると、藻汐短歌会が詠んだ「新嘉坡陥落奉祝歌」12首が載り(2-3ページ)、川柳の課題には前年に結成された隣組がとりあげられ、入選と佳作あわせて8句がみえる(11ページ)。同誌通巻第104号(1943年9月)はその表紙に載る口絵写真に、「本園特設防護団(職員) 防空訓練ニ於ケル防護団長ノ訓示」とキャプションをつけた。防護団は職員、連合(聯合) 奉仕団は療養者による組織か。

戦況が熾烈となる1945年は、すでに『藻汐草』

は休刊となっていて、そのようすを知るには手書き手づくりの『青松』をみることとなる(なお手製の同誌は巻号の表記がいりまじっているので本稿では号に統一した)¹⁹⁾。

その第4号(1945年2月)に書き写された水原秋桜子の俳句6句のうち3句に「警報」の語がある(「警報や寒月竹の穂を鳴らす／警報や雪一片の凍る石／警報の解けて夜明の田の氷」)。さきの『島昭和史』にいう「米編隊機庵治海峡を進行、退避の警鐘初めて鳴る。」をふまえての転載か。

その第6号(1945年4月上旬か)に綴じられた土谷勉の稿「潮音」は日記体の記述で、3月下旬の事項のつぎに、「◎引つづいて園長先生は、横穴式防空壕の位置選定について総代以下係を従へさせられ、山ぎは病棟間を巡視された。／◎時局急迫下、防空頭巾を百、常務員、奉仕団常備員のため製作方手配した。材料は芝居の新派衣粧をつぶすことに諒解を得たのであつて、製作一切は婦人団の奉仕によることになった。」と記し、同稿末尾には「◎防空態勢強化策について今いろいろ考究中である。奉仕団とも協議の上、やがて安心していたゞける具体案が出来るだらう。防空即生活、生活即防空である。防空を忘れては一日たりとも成立たぬ。確固たる無敵の構へを急ぎたいものである。」との決意がみえる。

同号にはまた、4月6日に開催された「防空問題」を議題とした「防空座談会」の記録が載る。そこでは総代石本俊市をはじめ、聯合奉仕団長、警防団長、青年副団長、婦人団長などが出席して、「横穴式防空壕」「防空分哨と宿直」「奉仕団からの依頼」が協議された。「敵機頻襲に際し、防空対策強化について皆様の忌憚ない御意見を承り、非常の際まごづかない様にしたいと思います。」との石

本の発言によってはじまった座談会では、「横穴式防空壕について、洗濯場の裏に一つ。十四号から北にずつと。それから三十二号室の裏と三十四号の処に掘るヨ定にしてゐる」「先づ第一番に洗濯場の裏のを試験的に掘つていたゞけないでせうか。」「十四号以北は幾つ掘るとハツキりきまつてゐる訳でもないのですが、出来れば大きいより小さいのを沢山掘りたいと思つてゐます。二ツ穴にするか」などが議論されている。

それらの場所を、『大島療養所二十五年史』(大島療養所、1935年)に挟み込まれた「大島療養所配置図／昭和九年十二月末現在」にみよう²⁰⁾。現在の大島会館北隣(旧桜公園のあたり)に「家族舎」があり3から12までの番号がふられている。その北隣に「洗濯場」がある。そのわきの丘のうえには「天理教会」があるので、いまもある2本の防空壕跡がおそらくこの「洗濯場の裏」につくられた「横穴式防空壕」なのだろう。現在は使用されていない通称北風呂のまえにあるゲートボール場のむこう北へつつづく寮も当時は「家族舎」で、13から32までの番号がふられ、さらに奥の左の山側に35と36がある。この配置図では33と34が欠番。家族舎の番号が1945年時点でもこの配置図のとおりとすると、北の山ちかくにも穴を掘る計画があつたこととなる。

『青松』第8号(1945年5月)に綴じ込まれた紙片に記された稿「潮音」に、防空壕についての記述がある(末尾に「土谷」の押印)——「◎横穴式防空壕構築に一般から勤労奉仕希望者を募つたところ七十九名あつた。うれしいことである。十一日からさつそく着手した。最北端から奉仕団の指揮により。／五月十三日現在もう八尺も掘りこんだ。この分なら案外完成が早いかも知れない。年寄組

19) 同誌にみる大島の戦時については、阿部安成「資料紹介シリーズ『青松』を読む⑦手づくりと、戦ひと、拳島へ—国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用について」(『滋賀大学経済学部研究年報』第23巻、2016年)、同シリーズ⑧「手づくりが震え戦く」(Working Paper Series No.257、滋賀大学経済学部、2016年9月)、などを参照。

20) 同書は藤野豊編「編集復刻版近現代日本ハンセン病問題資料集成」戦前編第4巻(不二出版、2002年)に収録されている。ここでは大島青松園入所者自治会所蔵の1冊を閲覧した。

が若者に負けまいと腕に縊をかけて敢闘中。」という。次号第9号(同年6月上旬か)には、「防空壕」「機雷監視」の語が頻出する。「防空壕掘り」の見出しにつづいて短歌が載る——「横穴の壕掘り急ぐ空高く飛ぶ日の丸のつばさ光れり／横穴の壕より出でて仰ぎ見る空の真澄みに昼の月あり／片居われ死を恐るゝにあらなくて横穴防空壕を急げり／掌に出来し血豆はうち見つゝ病みて久しき身を思ひけり／み民われ今日起たずして千歳に悔を残すも既に及ばず／片居われ安らに眠る夜を遠く都の空に敵機おごれる／大御母皇太后ます御殿の燃ゆと聞く夜はいねず祈れり／盲爆に宮城の一部炎上すと聞く一億の決意極まる／醜翼は空におごれる此日頃地は増産に馬冷薯の花咲く／正も義も勝より外に手はなしと仰ぐ夕空浄に晴れけり／熟麦の匂ふ夕べは故郷の山川思ふ田作りわれは／夏柴の新芽は光る垣越しに熟麦匂ふ風の吹き来る／今年生の楓の苗鉢に植えて水かふ時に故郷思ふ／彼我の陣近接をして炎むなす沖繩戦線思へば眠れず」——詠み手は笠居誠一か。

同誌第11号(1945年8月)は「高松戦災特輯号」として編まれた。そこには、女性かもしれない大原枝風の名で、詠題「高松空襲の日」の句が載る——「雲の峰へ劫火明りのはためける／壕口に敵機にらめる日焼顔／壕中に避難の団扇賑はしく／焼夷禍は夏の海へと拡がりぬ／焼夷禍の人と隔てゝ夏の海／罹災地の敢闘祈る草茂み／夏草をむしりて眺む災火かな／蚊柱や命惜しめば壕に入る／夏草や彼我弾幕に浮き出づる／空襲や振舞水に生死賭け」。

このころの在園者数の記録が同誌第5号(1945年2月下旬から3月中旬までのあいだに発行か)に見える——「◎現在入園者総数五七五名／普通

室 男 二四八名／女 八六名／特定室が二四一名である。／それで三月上旬の作業希望申請者が／一八八名／男 一四五／女 四三／作業総数が現在二二二である。従つて余りが三三／健康率低下とはいへ一般の奮起が希ましい。／“遊んでおてもお腹は減るものなり”」。

1945年前後の療養所のようすを、在住者たちはどう描いたのだろうか。編年体で記された『島昭和史』は、戦時期と戦後初期を第4章「諸行無常」と第5章「欠乏のとき」におおよそ割り当て、それらを5つの節にわけた——「9 祖国浄化の無頼県運動(一六、一七年)」「10 腹がへっても戦がつづく(一八、十九年)」「11 みどりの松がうらめしい(一九、二〇年)」「12 欠乏とのたたかい(二〇～二三年)」「13 最悪の医療」。史誌に配された戦時期の記述は、おおむね困窮と耐乏のようすで占められている。もちろん食糧をはじめ物資が減ってゆく生活は豊かではなかった。戦時総動員体制のもとでそうした療養所生活が強いられたのだった。ただ、療養者たちはその苦難のなかで、敵機を「醜翼」とよんで憎み、それらを撃破すべくわが身を機雷監視へと駆り立て、そのための防備として防空壕を掘り、「片居」(ハンセン病者)のわれも「一億」のひとりと数えられるよう「報国」に努める戦時を生きたのである。

ところで、大島の療養所内で編集発行された史誌は、『五十年誌』や『島昭和史』だけではない。「国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史」である『島昭和史』よりすこし遅れて、『わたしはここに生きた—大島青松園盲人会五十年史』(大島青松園盲人会、1984年)が刊行された。同書巻末にも17ページにおよぶ「盲人会年表」が掲載されている(318-334ページ)。戦時下の記録の

ひとつ、ふたつに、1939年11月1日、「大島神社建
立の勤労奉仕にかえ、一人一銭を徴集。会より一
円加えて献金。」、1943年6月25日、「青年団幹部
によりムロの木の杖四十三本が寄贈される。」との
記載がある。これらの記事は『島昭和史』収載の
年表には記されていない。だれもおなじ戦時を
生きたわけではなかった。

【附記】

本稿は、2018年度科学研究費助成事業基盤
研究(B)(一般)「近現代日本における病者・療養
者の生」(研究代表者一橋大学大学院社会学研
究科石居人也)による成果のひとつである。

